芦文翁 俳諧聞書

東 明雅

目次

刊行にあたって……東　明雅　2
聞き書……4
芦丈翁年譜……『芋日記』より　112
芦丈先生終焉記……東　明雅　116
五右衛門風呂……根津芙紗　123
芦丈先生と信大連句会東　明雅　127
索引……131

芦丈翁俳諧聞書

東明雅

刊行にあたって

東　明雅

芭蕉伝来の俳諧は、明治、大正、そして昭和初年あたりまでに殆ど消滅してしまった。其角堂の系統は永機が明治三十七年（一九〇四）に死んだあと、機一・永湖、そして其城まで及んだが振わず、雪中庵系も昭和九年（一九三四）増田龍雨が歿してから、あとは絶えてしまった。春秋庵の系統は三森幹雄が明治四十三年（一九一〇）歿して、準一・保雄と続いた。準一は『連句の実際指導』（昭和七年刊）などを著わして、伝統の保持に力めたが、そのあとを襲いだ鈴木保雄は名のみの存在であった。

辛うじて現代まで残ったのが、伊勢流（北枝・希因・蘭更・蒼虬・芹舎・凌冬・芦丈）と、無名庵の系統（野坡……霞遊・其桃・方堂・閒石）、さらに美濃派獅子門（支考……蘆元坊……五竹坊……於兎・芦月・十雨）の三つの流れであろう。

昭和四十五年あたりを機として、再び連句は息を吹きかえし、今日では連句復活が叫ばれる時代となった。しかし、その復活した連句は、芭蕉が創り出し、完成させた俳諧と、凡そかけ離れたものとなっているのが実状である。

これは、俳諧の本質や伝統を全く知らない俳人や詩人たちが、なぐさみに連句をもてあそび、己れひとりよしとしたものが、その弟子どもにうけ継がれ、忽ち世に弘まったものである。

連句（俳諧）は、付けと転じを主軸とする日本独自の文学である。これは連歌の時代に発し、芭蕉により完成されたもので、この特質を失った現在の連句は、到底蕉風俳諧の流れとは言い難い。

この点を、はじめて指摘されたのが芦丈先生であった。「連句（俳諧）を滅亡させたのは子規であるが、それを歪んだ形で再興したのは虚子である。二人の罪を比べれば、子規よりも虚子が重い」とは先生が常々口にされた言葉であった。

私は先生の遺志を襲いで、何とか現代連句人の蒙を啓こうと努力して来た。ここに先生御生前のお話を再録するのも、先生の真意をその口からそのまま伝えようとする意に外ならない。

刊行にあたって、助力していただいた式田和子さん外の方々に感謝申し上げる次第である。

文音
手紙や葉書、ファックスなどで句を交換して一巻を首尾する方法

梅游（吉岡梅游）
香川県丸亀の人。茂木秋香の高弟。根津芦丈の教えもうける。平成二年没

竹邨（中村竹邨）
高崎在。茂木秋香の高弟。根津芦丈と肝胆相照らし両吟集「山一重」あり

この一文は、昭和三十八年三月二十二日、松本市浅間温泉士族の湯で、根津芦丈先生のお話を聞き書きしたものである。当時、先生は九十歳だったが、身心ともに壮者を凌ぐほどのお元気であった。

芦丈（以下**丈**）　あのまあ、明治時代には旧派は旧派なりで、それは相当な俳諧師が、全国にかなり沢山居たですだ。それらの人に習ったのが、その孫弟子位になって、ハガキが一銭五厘の時分（大正から昭和初期）にね、生半可に習った者同志が文通（＝文音）で、何巻まいた、どうしたなんていうのが、相当の年齢になって来て、その地方のまあ、大先生というような向きのが至るところにあるですだ。

明雅（以下**雅**）　はあ。

丈　それでまあ、西の方でね、まあ、今、西の方に行けば丸亀の梅游（吉岡梅游。平成二年十二月三十日没）だけどね。

雅　梅游さんという方は、最初から先生のお弟子さんでしたか。

丈　それは何だだ。わしとごく仲よくやった高崎の竹邨（中村竹邨）ね。あの人がまあ始め教えただね。それで竹邨氏の言うにね、梅游の奴、あれ悪達者だからして、ちょっとしぼってくれなっていってね。

雅　その竹邨氏はどなたに習われたわけですか。

明雅 48ノ
信太郎

秋香（茂木秋香）
文久三年、現在の深谷市生れ。昭和一六年没。下平可都三門

可都三（下平可都三）
文政五年―明治四三年没。久米逸淵の門。門人に茂木秋香、荒井関窓などがいる。本名＝雅能。国定忠治の処刑に立ち合ったのは有名

勝幸（矢羽勝幸）
『俳人下平可都三』昭和五〇年に刊行

忠治（国定忠治）
江戸末期の代表的侠客。上州国定村の人。文化七年―嘉永三年。嘉永三年四月二一日処刑。徳川時代の末、天保、弘化、嘉永期における有名な博徒

丈　竹邨はね、秋香（茂木秋香。昭和十六年十二月三十日没）という。

雅　そうそう、秋香先生でしたね。その秋香先生はまた、どなたに。

丈　それはかつみという人ですだ。上州の、仮名でかつみという人ですだ。これは明治時代の有名な人ですだ。上州に烏渕（上野国碓氷郡烏渕村水沼）という所あるね。そこのお殿様だだ。四千石か五千石かのね（矢羽勝幸氏著『俳人下平可都三』によれば、同処の名主）。それで戒名など院殿大居士ですだ。そのまあ、かつみという人はえらい人でね。それで真庭念流のね、剣術を習う。するとすこし行ったら目録を呉れたちうだ。何の事だか知らんが貰って。そしたところが、仲間の連中がね、目録と言っちゃ叩くちうだね。こりゃ俺が目録をもらったから、野郎ども叩くんだと。それからして師匠にね、ま、この目録は返すと。目録だけの力にならねえうちに、こんなものくれるから、野郎ども俺の頭叩いてたまらねえと言って、それからみっしり稽古したなんてわ、剣術の方も相当なものだちうだ。それからしてあれかね、あの郡は何郡だったかね。あすこから国定忠治が出て、国定忠治はかつみさんが処分するだね。

雅　それじゃ、幕末から明治にかけての人ですね。

丈　そうですだ。それで、忠治を磔柱に上げといてね（嘉永三年四月二十一日のこと）、それからかつみさんが床几に腰をかけてて、「忠治、何

流芳
越後の人

黒髪庵
富山県東砺波郡井波町瑞泉寺一一代住職浪化上人が芭蕉の遺髪を貰いうけて築いた「翁塚」のほか、茅葺きの芭蕉堂、浪化の句碑などあり

事でも遺言があるなら言え」とこう言ったら、忠治が磔柱からね、「この期に及んで何も言うことはありません」、「上御役人衆、下御役人衆、甚だお手数を相かけまする」と言って、「これでよろしい」と言ったちうだ。これを秋香老に話して、「忠治はえらいもんじゃねえか。磔柱の上にいて、今槍で突かれる前に、上御役人衆、下御役人衆、甚だお手数を相かけまする。立派な言葉じゃねえか」と、そういって話したと。それから秋香老もかまわねえ人だもんで、「その槍で突かれた時にゃ、どんな顔したね」と言ったら、「馬鹿野郎」というわけでね、「そんな事を聞く馬鹿がどこにある」ちうわけでね、「破門するぞ」ちってね、でかくおこられたというだわね。いくら忠治がえらいたってね、横っ腹へ槍を突かれて笑ってるもんじゃねえだ。

そんな話もありね、そして、かつみという人は何だだ、連句の早い人でね。その頃ね、越後に流芳（？）という人があってね、この人がまあわらんじを二十年はいた。行脚することをわらんじはくというが、二十年も旅っころびで、そりゃよくこなれたいい連句でね。それが越中の黒髪庵だと言ったが、旅へ出た時おちあって、やあ久しぶりだったなあちゅうわけでそれから発句見せあったところが、とてもよくなっていてね、やあ流芳さん、いい句を詠むようになったなちゅうわけで、それからか

琴堂（加部琴堂）
上州高崎の人

松宇（伊藤松宇）
安政六年―昭和一八年。本名＝半次郎。俳諧の研究、考証に大きな功績あり。加部琴堂門

つみも句を出して、両吟を二巻立てて、二人ではこぶと、そしたら早いとも早いとも、まあその二時間で二巻まいて、西と東へ別れて行ったというが、二時間じゃねえ、それは正味四時間かかっていると。でも二時間だっていうじゃねえかったところが、越中の霜井のいわく、そりゃ、俺のうちの上りはなの事だで、俺が一番よく知っていて、それは人が誇張して、そういう事をまあ二時間に二巻まいたというが、それがいい巻だだ……。それから何だだ、上州の高崎に加部琴堂という人があってね。琴の堂というだ。これもかなりの学者で、高崎一の財産家でね――横浜の開港時分に何をしたかしらんけんど、相場で損をしたてわけだね――けっこう何もないような貧乏になっちまって、それから上田へ行って借家を借りて、そこでまあ連句をやったり俳句をやって晩年はね、伊藤松宇さんは加部琴堂に連句をね、五、六巻教わったという話だ、二十時分にね。

それで秋香老がお伴をして、かつみ老が琴堂の家へ行ってね――両吟をしている。秋香老はかつみとの両吟をもっていて、それから付ける。そしたところが、前句を
耻かしと思ふ心が恋やらん
というかつみの句で、それにま秋香老が付けるけど、持って行きゃまず

心付け
意味付のこと

付かない。付かない。朝から付けてるけど、一句も付かない。それから炬燵にあたっていた所が、炬燵掛けの裏がねカナキンのうらだちうで、随分まあ、琴堂老はね、高崎一番の身上もちの人が、みすぼらしい暮らしをしていたわけだ。それから、そのマア、

炬燵蒲団の裏はカナキン

と付けて持って行った。そしたら、ンちうわけで、「カナキンならどうした」とこう言った。ハテ、カナキンがいけねえなと思って、それからまた炬燵へ来て考えて、

炬燵蒲団の裏はつぎはぎ

として持って行ったら、「ウン。よろしい」と言ったというけどね。その秋香老が苦心談にまあその話をするが、その付けはね、明治時代の付けだ。それは明治の大家の付けだ。

恥かしと思ふ心が恋やらん

炬燵蒲団の裏はつぎはぎ

と。

雅　ちょっと心付けですね。

丈　つぎはぎだから恥かしいというような、ね。そういう、ま、全部というじゃねえが、明治時代の大家というような衆は、大方の人が、ま、

そんな風だね。それでそのかつみ老とわしがね、上田の上村館という宿屋で落ちあって、あの両吟したことがあったけどね。その時、わしは三十四。三十四だ。かつみ老は八十七でね。八十七だけど眼鏡もかけないでね、達者な人で、それからマア始めたところが、秋のこんでね、ちと寒いで、寝床の中でやりてえちうわけで、それから隣座敷なもんだで、真ん中の唐紙を開けて、それから両方の寝床から頭出してね、そしてまあ、硯真ん中に置いてから、わしが付けるとね、筆を取ると、こうやって見るだね。で付いていると、それでいいと。それから頭あげてみて、付いていねえと、またこうやって、枕をつける。ハア、また筆を取る音がすると、またこう。

雅　ハッハッハ――。

丈　そうして何しろねえ、夜中ごろまでにねえ――エーなんだだ、あと五、六句というところまではこんで、それから老人枕つけて鼾をかくもんだで、それでマやめて、それからあと文音でやったがね――ア、そういう、まあ、そのさっそくな隠居でね――わしゃ他門との連句というものをそういう人にぶっかっただ、はじめて。

雅　ハーハハー。

丈　その連句はこういう連句で、――

尾越の鴨
初鴨の渡るとき、山を越すとき、峰すれすれに越すので尾越の鴨という。鴨は三冬、尾越の鴨は晩秋

蜩
蚊帳

秋なれやまづ一日の夕あかり
と、うん、これを月としていただいて、それからしてね——
　まだ日もおかぬ白萩の庭
そうすると老人ね、
せせなぎにあひるがのけば鴨おりて
と、そのほかに、
試みる酒にいつもの友よんで
と。もう一つあったけどそれは忘れたが、どうもそのせせなぎの句が丈高いもんだで、先生、こりゃ欲しいけれど鴨はただ鴨としとくと冬季だね。じき直して文句も言わずに
降りた鴨尾越の群や誘ふらん
と、尾越の鴨にすれば秋だもんだでね。それから儂がそれにね、
　ここな渡しは稀な乗合
と付けて、老人が
どの家も覗いてみれば昼寝どき
それから儂がね
　蜩の染汁わるくさきなり
と付けて、そんな表でね、出来て、相当なしっかりした巻だけどね——。

この一路
根津芦丈著。昭和三六年五月刊。連句集、米寿記念として、連句三七巻。ほかに「山一重」「下蔭三吟」を掲載

にひはり
俳誌。伊藤松宇が明治四四年六月創刊

猿男（森猿男）
本名＝廉次郎。大正一二年没、六三歳。東京高商卒。銀行員。明治二四年伊藤松宇と俳諧椎の友社を結成。新俳諧の教順に努め、のち「秋声会」に属する

黄雨（川村黄雨）
文久三年＝昭和一〇年。江戸生れ。俳諧を森山鳳羽に学ぶ

エそんなのはまあ、それ（昭和三十六年刊『この一路』）へは載せなんだけどね——その旧派の連句が載っていると、新しい方面の衆がいやがるでね。ウ〜ン、ウ〜ン、ウ〜ン。
　それで、伊藤松宇さんの連句が今度載るけどね。まことにおぞい連句だだ。相手も悪いけどね。何しろその「にひはり」という雑誌を経営していたけれど、そのまあ組の人と連句をやるけど、制約の研究ばかりしてね、あの本にはこうあった、この本にはどうあったと言って、まあその何だだ、何だから何だという、物から物へ飛んで行くような連句でね、儂どもはそれで傍観していたですわ。その傍観している時分に川村黄雨という人があってね。これはまあ、何の森猿男だの、森じゃねえ、猿男だの。

雅　ハア、ホトトギス一派ですね。

丈　そういう連中の仲間の衆だ。新派の本当のはじめにやった子規たちとね、やった衆で、それが貴族院の書記官を一生やった人だがね。それで、森山鳳羽先生が勅選議員で貴族院の生字引ちう人でね。これがいい連句の人でね、この人にならってるからして、やっぱり川村さんも傍観して笑っていた方で。それから、その当時、その仲間に鵜沢四丁というね、あってね、四丁さんはその仲間になってやっていたけど、どうも本

鳳羽（森山鳳羽）
天保一三年―大正八年
貴族院議員。若年の頃、大阪の茶飯堂蟻兄に俳諧を習う。明治、大正の俳諧の大立者

四丁（鵜沢四丁）
明治二年―昭和一九年。千葉県安食の人。本名＝芳松。明治二七年秋声会に属し、昭和七年「俳諧」を創刊、連句を提唱した

俳諧
明治二六年、正岡子規が伊藤松宇らとはからい創刊したが、二号で廃刊

他石（贄川他石）
明治元年―昭和一〇年。静岡県生れ。鳳羽に学び連句の研究、実作家として有名

凌冬（馬場凌冬）
天保一三年―明治三五年、伊那市狐島生れ。本名＝学之丞。円熟社を興し、俳諧をひろめた。泮水園芹舎門門人に根津芦丈その他がいる。『旅硯』『竹園随抄』

旧派
明治二〇年代新派と呼ばれた子規、紅葉以外の旧い伝統をもった流派をいう

子規（正岡子規）
慶応三年―明治三五年。本名＝常規。俳句改新に情熱を注いだ。連俳非文学論は有名

新派
明治二〇年代からおこった尾崎紅葉、正岡子規などの流派をさす

天明の鎧
蕪村など中興期時代の俳

当じゃねえと思うもんだで、儂にマ、いろいろ聞いて来るし、それから両吟やったり、三吟やったりしてね、「俳諧」という連句専門の雑誌を四丁さんはじめて。それから何だだ、余程四丁さんにゃ教えたり、仲間こしらえてやったりしたけどね、どうも四丁さんの連句も妙な癖があって、いい連句にゃとうとうとうなりっこなし、おしめえになっただがね。ウ～ン。

そこで四丁さんのこせえたあれは『俳諧辞典』というじゃなく、辞典のようなかなり厚い本こしらえて出版したのを、まあ、あれはどこから出したか儂は買いもしなかったけどね、そのしまいへね、儂と竹邨氏（中村竹邨）とやった両吟を一巻とね、伊豆の長岡の温泉で、他石さん（贄川他石）が捌きをした「にひはり」連衆のね、その巻と二巻載せてあるだ。それで儂はね、何の、子規が明治二十六年頃、その新聞の「日本」でね、旧派ひっぱたいてね、いる最中に儂ら旧派の凌冬（馬場凌冬）という人にならって、旧派のヘエその先生が日本一いいと思って習っている時にまあ、旧派ひっぱたくだね。くそみそに、今に旧派のえらい人にたたかれるぞと思っていたが、たたく人は一人も出っこなしで、子規の独り舞台で、新派おこしちまって、その時にその新派の本当のはじめちうものは松宇さんの「椎の友」という方が先へ、それへその会へ子規もよっぽど通ってるですだ。そのあげくが、その旧派を叩いたのになって、

それで何しろ子規のひっぱたいたやつがいまいましくてならねえような気持がついてまわるもんだで、松宇さんの何だだ、「にひはり」という雑誌仲間になって。ところが、松宇先生はだんだん何だだ古くなっちまってね。新月並派だとか、天明の鎧が脱げねえとかいうような事をいわれて、実際そんな風で、仕舞にはわしらにしても、まあ困った方で、中途で逃げられもしなんで、それからそのうちに何だだ、自分の方から出身の伊東月草というね、あの人が「草上」という雑誌出してたもんだで、それからその仲間になって、現在の梅の門氏（金尾梅の門）のやってるのは、それの系統で、そのあとについて来た人だね、ウ～ン。それで伊藤松宇さんとの両吟でね、たまたま途中で、文音でやってたもんだでつかえるだね。雨の句の打越に月のかんかんと照っている琵琶法師が、背（そびら）を向けているというような句だもんだで、雨の打越へ月じゃ困ると言ったところが、そんな事はねえと、古人にも例があると、などと言って例をあげてまあ反駁して来てね、それで一頓挫した。その例なんぞ、どうだったら、

生駒きづかふ綿とりの雨

ちうのがあるだ。それら現在、雨降っちゃいねえだ。そだから月が打越にあってもね

風を真似たもの

月草（伊東月草）
明治三二年―昭和二一年。長野県生れ。昭和三年「草上」創刊。連句は乙字、根津芦丈に師事。ラジオの趣味講座をまとめた『連句大概』（昭和二一年刊）がある

梅の門（金尾梅の門）
俳人。明治三三年、富山生れ。大須賀乙字門。昭和三年、「草上」創刊とともに同人となる

新月並派
明治二二年、松宇は俳諧椎の友社をおこして俳諧革新の一翼を担った。それが古くなったものを皮肉ったもの

草上
伊東月草主宰。昭和三年

（有明高う明はつる空）
生駒きづかふ綿とりの雨
河内あたりのね、生駒山では、どうも雨が降りはじめたと言って、急いで綿を取ってると、いう句だもんだで、それは月の打越になってもね、決してかまわねえと、そな事と、仲々鼻っ柱の強い人でね。

雅　松宇さんですか。

丈　エエ。それから、やがてまあ、
銀燭に背を向けし琵琶法師
と直して来たもんだで、それから又運んで。そしたところが、ちる花の音きくまでの静かにて　松宇
の次に、わしがね、
子も蹲石を覗く鶺鴒　芦丈
と続けただわね。鶺鴒は秋季だと、いや、秋季たって、子だからしていいと言ってやると、鶺鴒の子という季題は、どの季題の本にもねえと、季題の本にあってもなくてもね、ちいさい子のね、黄色い色のうすいようなのがね、花のちる下をね、チョンチョンと飛ぶ所を見たから、わしが付けたんで、それからそこで又一頓挫やって、その打越へもって行って、

創刊の俳誌

月の打越
月と雨は天象の打越である

蕉堂（中山蕉堂）
長野県丸子町の俳人。伊藤松宇の甥

馬の罘湯を捨てる谷川　松宇
というね、そいつは本当はまずいだね。

雅　馬の罘湯ですか。
馬の罘湯を捨てる谷川
ね。

丈　だけどまあ、それを又まずいと言っておりゃ、又ヘエけんかで止まっちまうしね。そこにまあ、馬はいねえと見りゃいいだで、我慢しておいただ。そういう風で、仲々ね、季題にばかりこだわっているだ。今度の入集のには、丸子の蕉堂（中山蕉堂）との巻でね、それにゃ何があるですだ。素秋が、素秋の話しないけどね、素秋という、秋季で月のない秋をね、素秋と言って嫌うですだ。ウン、そりゃ芭蕉にも素秋のとこがあるけどね、それにゃそれなりの理由があるですだ。ただ理由なしの素秋なんちうものはいけねえけど、まあ、松宇さんのやった仕事だでするで、そのまましといたけど、そこ月を出しゃ、月が四つも出る巻になっちまうもんだで。
ウン　それじゃこれの何だね、自他、それから、おもしろいようなところ、控えはござんすか。

雅　ええ、ございます。

信大連句会
昭和三六年九月、根津芦丈を指導者として松本市の信州大学を中心に編成された。池田魚魯・東明雅・高橋玄一郎・小出きよみ・藤森雪渓・細田高夷・望月紫晃・藤松素香・田淵芹川・倉科渓水などがメンバー

雪渓（藤森雪渓）
信大連句会

高夷（細田高夷）
信大連句会

魚魯（池田魚魯）
信州大学長、理学博士。信大連句会のメンバー

紫晃（望月紫晃）
信大連句会

素香（藤松素香）
信大連句会

（これから信大連句会作品第八号、根津芦丈捌、「雪」の巻に対する自解が始まるが、あらかじめ、その作品を紹介する）

雪

根津芦丈捌

雪のバス湖の辺チェン捲き直す　雪渓
スケート肩に人の犇く　同
吹きおろす風ひょうひょうと樹を枯らし　高夷
郵便幾日溜めて届ける　同
宵過ぎてふと名月に気のつきて　明雅
川霧流る峡の一村　魚魯
秋天下コーラスは山の歌ばかり　紫晃
食ひ気盛りも男なみにて　雅
おのづからお夏といふ名おもしろく　同
釣りっぱなしの蚊屋のふくらむ　芦丈
団扇いる程にもあらず松の月　魯
音もこまかに須磨の漣　素香
漁業船拿捕のニュースを又耳に　晃

埃拭うてまはす地球儀　香
子等はみな都に住ませぢぢむさく　渓水
土にほはせて早き物の芽　同
花の道善の綱にも続きゐて　香
巣こぼれ雀どこぞにか鳴く　水
人を呑み人吐き霞む城高く　渓
写真記念にとれとすすめる　同
片言の碧い瞳夫婦もてあまし　雅
シャネルファイブの薫りどこまで　同
百姓にして客泊める家ありて　渓
門の流れに洗ふひともじ　魯
名鐘もひびの入りしか音寒く　丈
勧化衆草鞋新しくはき　夷
大和路の空紀の路よりなほ青く　雅
剃り立て頭月に照らされ　魯
柿盗む子等のしぐさを可笑がり　夷
村の祭の太鼓聞こゆる　魯
強酒（しひざけ）に酔ひしれ出れば野分めき　香

立句
発句のこと

向い付
前句の人物を見定め、その人物と対応するような別の人物を向い合わせて付ける方法

黒潮のりて漁にわく浜　　魯
繋ぎをく牛が端綱を舐り切り　　水
何の匂ひか風がもてくる　　夷
躬恒形の硯を花に使ひそめ　　丈
絹糸のごとけぶる春雨　　香

昭和三十八年二月二日　首尾

丈　マア、立句のチェン捲き直す。これはまあ、自でも他でもいいわね。エエ、だけど、雪渓さんが自身でチェン捲き直すんでもねえだもんだで、一応これはまあ、そのバスの運転手が、運転手だね、その捲き直している所へ何だだ、スケート肩にした人たちがぞろぞろとひしめいていると。これも他、他で、これをむかいあわせてあるだ。他の向い合せ。

雅　向い付、そういう形ですね。

丈　そうですだ。それからしてね、
吹きおろす風ひょうひょうと樹を枯らし
とこういうのは、て留めでもらん留めでもないけどね、句柄が相当のびのびしているでしょう。

第三の留め
て、にて、に、らん、もなし、が定法。それ以外のものでも悪くない。例
吹きおろす風ひょうひょうと樹を枯らし

冬季三句
夏、冬は一句～三句続けてもよい

雅　そう。うまいですね。ところで雪のバスというのと、スケート、これはもちろん冬ですね。樹を枯らすも冬季で、これで、冬季が三句続いておりはしませんか。

丈　エエ、これは冬季が三句並んでいるだ。樹を枯らし、だもんでね。けど、それはまあ、制約から言ってもネ、夏冬は一句で捨ててもよいし、三句続けてもいいという。

雅　マア、三句まで並んでいいのですね。これは場の句ですね。

丈　これはその場だ。それから、
郵便幾日溜めて届ける
と、これはまあ、こんなウ～ン、天気も悪いとかいろいろな時だで、この頃まあ、去年あたりね、イヤ郵便局の、その悪口も言われているが、まあ、そんななんで、それからして、
宵過ぎてふと名月に気のつきて
と、そうするとこれは、うっかりして名月だかなんだか知らなんでいたが、ウ～ンあれえ月が、やあ名月だぞと、今夜はまあ名月かい、ああそうかいというようなね、郵便がたまって届くというような、そんなうちにありそうなような、マア郵便幾日もその日、その場みたいなものです。

蕉風をふみ出す
蕉風の埒外、ともいう。蕉風では禁止されている手法

雅　宵過ぎてふと名月に気のつきて
は気が付いたんだから、自、自の句ですね。

丈　ええ自ですだ、これはね。それから
　川霧流る峡の一村
　これはまあ場ですだ。ほいで、川霧があって月が見えなんだというような、そういう味を考えることは、ことによると蕉風をふみ出す事になるでね。それはさけて考えにゃならんだ。ただ川霧のといったってね、川霧というようなものは川の上だけの霧でねえ、それで低い霧もいくらでもあるんだで。それから、
秋天下コーラスは山の歌ばかり

雅　これは自にも他にもなるんですが。

丈　そうですねえ、コーラスは山の歌ばかりだで、これは他とみる方がいいね、ウン、ウン。それからこの句はねえ、
　食ひ気盛りも男なみにて
というと、これは娘たちばっかだね、え〜、このコーラスは。

雅　なりますね。

丈

アシライ
前句の流れや勢いに乗って素直につける付け方。また、特に、前句の人の容姿、持物・衣類、あるいは周辺の器材・食物などをもって付けていく方法をいう

恋離れ
前句が恋句のとき、前句に付けると恋の句になるが、独立しては恋の句にならないものをいう

おのづからお夏といふ名おもしろく
という名は、このなんだだ、食いざかりのね、この娘のうちにそんな名があるわけだ。

雅　そすと食ひ気盛りはもちろん他になり……。

丈　他で、その次は他のアシライになるだ。

雅　アシライというのはどういう……。

丈　アシライというやつは、その前句のうちのありそうなものをね。それから
　釣りっぱなしの蚊屋のふくらむ
と。

雅　ハア、ここが付けにくかったところでしたね。お夏というあれが出たもんで。

丈　こんなのはちょっとおもしろいだ、こういううけ方ね。

雅　なるほどフンフン、そすとこれはまあ。

丈　これは恋離れになるだ。

雅　マ、これは先生、うまくお付けになったと思ってね、本当に感心したんですけど。

丈　こりゃ、あのう〜。

人情の有無
一句の中にどのような形にしろ人間が詠みこまれている句を人情の句といい、そうでない句を人情なし（場の句）という

雅　どうもみんな、付け煩っていましたね、ここ。

丈　ほだでわし、付けたけどね。恋離れというものはね、まあ、こんなようなのがね。こりゃ見方によりゃ恋でも何でもねえけんど、前句の方から言って行くと、そのう、恋の匂いがただようだ。

雅　や〜、相当残ってますよね、見方によればウン。

丈　恋離れちうものは、一体ね、ここで、そのまるきり人情なしの風景なんぞに、くいと移ってしまうはまずいだ。すんなりとその匂いが何ものかあるようにね、こんら恋離れの一寸手本にいいね。

雅　そうですね。

丈　それからこんだ、その時の風景の状況になるだ、

団扇いる程にもあらず松の月

と、フンフンほと、その

釣りっぱなしの蚊屋のふくらむ

というだで、松に月がさして、それからして、ほどよいその風が吹いてることがこれね、団扇のいるほどでもない涼しい、その気分のいいと。それをね、

音もこまやかに須磨の漣

と、風とあって波というじゃまずいけど、こっちの方、このふくらむも

物付け
前句の中にある物にすがって付けるやり方。おもに、貞門俳諧で用いられた付合手法。前句のことばを手掛かりに、そのことばに関連することばをもって連想発展させる契機とした付合の手法

のとあるけどね。別にまあ風という文字をもっておらないからね、まあ波が。

雅　と、これは音もこまやかにという、こまかにすこし叙情の味がありますかね〜。

丈　まあないね。

雅　じゃ、人情なしですね。

丈　こらまあ人情なしだね。音といやそりゃ耳にくる、そりゃ自、見といやあ目にくる、そりゃ人情だって云ったじゃ、あらゆるものはみんな人情なわけで、それで同じなんでもね、まあ見るというのと、まあそれから聞くという、聞くという方が人情がよほど深くなってくるが、見るちうのは句によっては見るといってみてもまあ人情なしに扱う、それからここでね、ウンウン、

漁業船拿捕のニュースを又耳に

とウン、これはね須磨の漣というのに漁業船じゃあねえ。その句によっちゃ。これは物付けになっちまってね、古風になっちまうけど、漁業船が拿捕されたということをニュースできくだもんだで、その漣と漁業船がちっともさしつかえになっちゃねえだ。こういうふうにいけば、まあこんらじゃそうじゃないけど、芭蕉の連句には落とし穴があるというの

はねそれは、あの漣と漁業船じゃいけねえと言っても、いやそうは言っても、これはただニュースで聞いただけだからして、漁業船そのものがそこにねえからいいと、ナルホドと言わせる。まあちょっとした落とし穴の一つのようなね。

雅　なるほど、ニュースを又耳に、これはそれで……。

丈　これは自だね。又かいと、いやなこんだなあと、それから

　埃拭うてまはす地球儀

と、これは家の中に入るだね。地球儀で、それからしてその地球儀の埃をはらってまわすと、ほとそのまあ、地球儀のうちのね、エーどこであるとか、ここであるとかいう、その拿捕したことのまた朝鮮の海だとかいうような、それまでに穿鑿すると、近すぎるということになるけどもね、ただ埃を拭うてまわすきりといって、ただそれだけのこと、と深く穿鑿しない方がいいだ、こういう付けは。こりゃ自の句ですだ。

　これがね、地球儀や何はただ、床の間の飾りものにしてね、エー埃もはらったことのないようなのを、埃をはらうという句で、これ、こういう句も珍しい句ですだ。それからして、そのはらうその人はというようなこと、

子等はみな都に住ませぢぢむさく

その人の付け
七名八体の一。前句の人の動作や行為にふさわしいものを見定め、これを手掛かりに付ける方法

その場の付け
七名八体の二。前句を受けて、そこに詠まれた出来事にふさわしい場所を見定めて付ける方法

善の綱
開帳、供養などの時、仏像の手に掛けて引く五色の綱

と。

雅　その人の付けですね。

丈　これはまあなんだね、この地球儀の埃をはらう人、その人だ。つまりね、エー、エー。

　それから次はね、

　土にほはせて早き物の芽

その場の付けだね。

花の道善の綱にも続きゐて

とこれはまあ、善の綱というから、いずれお寺かねえ、エーお堂のような所で、供養塔が建っている。そこへ、まあ、晒の布でなった縄をね、まあ、それに限ったことはねえが、そのお賽銭箱にね、その供養塔から引っぱって来てね、お賽銭箱に結び付けてあった。そんなのわし見たけどね、お賽銭投げてその善の綱に手をふれるだね。

雅　そうすると、これもその場。

丈　そう、その場だね。前句がまあお堂かお寺の庭に物の芽が出てると、それから次が

　巣こぼれ雀どこぞにか鳴く

と、雀の仔が巣からこぼれて、エー落ちたか、どこかに、チュウチュウ

玉が転ぶ
一巻の展開が無理なく滑らかであること

明治維新
一八六八年を中心に前後二〇余年に亙って大変革があり、一五代将軍・徳川慶喜が大政を奉還して王政復古となり、現代社会の原型が成立した

といって鳴いていると、その堂か寺の付近にありそうなことだね。

雅　これもその場ですね。

丈　ええ、その場のできごと。またできごとというが、その場になる。けど、この物の芽がまあ、畑なら畑でこっちはそれとは違う場所だでね、生物であり、ウンウン、それでね、この、なんだだ。植物があって、またこっちの方にエー、かりに道とか橋とかいうようなものになってくるとね、この地文、つまり地との関係はどうなると、これへすぐこれならいいけれど、またここへきたじゃいけねえから、こういうものを玉が転ばない、というだ。順に転じて行かにゃならんやっ、転ばして行った玉がここでつかえる、と。

それで、玉が転ぶという事で、最前も森山鳳羽先生の話をしたけれど、森山鳳羽先生はそれがまことにやかましかったんだ。それであの先生の連句を見ると、見事に気持よく玉が転んでいるですだ。森山鳳羽先生の話ちっとすりゃね、森山鳳羽先生はそのネ、京都の料理屋の出前持をしていて、それからそれが明治の維新の時でね、西郷だ木戸だという人たちが、もう新撰組に狙われていて、どうにも出て歩けない。木戸なんて人は縁の下に、そうまあ、あの松菊というその後奥さんになる芸者にかくまってもらって、縁の下にいて、食事はもらって喰べてたという程の。

新撰組
明治維新の際、徳川幕府は剣槍に堪能な者を募り一隊を組み立て、浪士鎮撫に当たらせた。文久二年―明治元年。近藤勇、土方歳三、芹澤鴨など有名

松菊
のちに木戸孝允の妻

実美（三条実美）一八三七―一八九一。維新の元勲

具視（岩倉具視）
一八二五―一八八三。維新の元勲

孝允（木戸孝允）
一八三五―一八七七。維新の元勲

隆盛（西郷隆盛）
一八二七―一八七七。明治維新の大功臣

まあ、あぶないようになって来てからに、三条だの岩倉だのという人に手紙やりたいけれど、なかなか難しくてやれない。それからその森山、出前持だもんだでね、それで出前を岡持さげて、それから手紙をもってお使いするだ。ハアそれは非常にその事で森山ちうのは役にたって、それが明治政府が出来てから何年たってだか知らんが、あの木戸やね大久保、西郷というような衆が、や、気なしでいたけれども、あの森山もまあ大変骨折っておらの為によかったが、あれも何とか役人に取りたてまいかと、そうだそうだちゅうわけで、さてそれじゃどうするだ、何がい*い、ま、今、石川県知事が丁度ねえからして、石川県知事にしてやれちゅうわけで、出前持、いちやく石川県知事、まあ、その時分にゃ県令と言ったがね、ハアそうした所が石川県知事にした所が、出前持した程の人で、下の状態によく通じているからして、いやいい知事さんだちゅうわけで、こんないい知事さんをどこにもやらないでくれろちゅうわけで、石川県知事何年やったかね、よほど永くやったようで、それからして、あの勅選議員という制度の出来た時にね、第一着に勅選議員になる。勅選議員で一生暮らしちまうがね。それでそれじゃ、その出前持でいて、誰に連句ならったかというとね、大阪の蟻兄という人に習っているだ。アリノアニという人、何かの集でその名御覧になった事あるかね。蟻兄

＊ 正確には富山県令であった

蟻兄（高松蟻兄）
梅室門。大阪の俳諧師。茶飯堂と号した森山鳳羽の師

狐雨
陽が照ってから降る雨、日照雨

にならったと。それで淀川をその舟で、下ってはね、蟻兄の所で連句を習って、又、帰ってくると。それから或る時にね、俺その句ちょっと忘れたけど、狐雨というね、狐の嫁入という、日のてらてらとしてからふる雨のことをね、狐雨という前句でね、それから最前の秋香の話じゃねえが、朝から晩かたまで付けたけど、どうしても付かない。それからして、お暇して出たところが、女持の小扇をひろったちうだね。それからしてね、その時にゃまあ、ぬかるみであったかねえか、ま、前句が狐雨だからして自分で考えつらが、

　女扇を拾ふぬかるみ

と付けて、どうしても付いているような気がすると思って、小帰りして、こういう句を、いま、こんな扇を拾ったから付けたったが、それから、うん、

　女扇を拾ふぬかるみ
　そりゃ、男扇だっていいじゃねえかと、それから蟻兄が直してくれたちうだ。

　女扇を拾ふ軒下

と。そうすると狐雨が降って、それから軒下へ屋根下へかりて入って。それから女衆の事だて、ま、帯がゆるんでいるとかね、襟がどうしてる

其鳳（渡辺其鳳）
肥前の人。明治維新の功臣

利通（大久保利通）
一八三〇―一八七八。隆盛、孝允とともに維新の三傑といわれた

とかいうのをちょっと繕う。その拍子に挟んでいた扇をちょっと置いて、それから忘れて行ってしまったと。これも最前の話の明治時代の先生たちの付けに近いでしょう。ちょっと理屈があるでしょう。そういう付けをする。それはやがて本当の正風の芭蕉の考えてる正風にはちょっと遠いだ。明治時代の先生ちうものはね、ま、いくらかそういう風に小理屈の付けが時代の連句には多いですだ。

雅　なるほど、森山という人はそういう方ですか、ホウウとはどう書きますか。

丈　鳳凰の羽、森山鳳羽。それをね、その当時森山鳳羽、渡辺其鳳ね、渡辺其鳳なんていうのは渡辺昇ね、あの会計検査院や何ややった子爵だ。これはおそろしく剣術の強い人で、それで新撰組でも渡辺だけは、どう付けて歩いても斬れなんだちうがね。強くて隙がなくて、それほどの人でね。それが大阪の府知事をしていて、そした所が、大阪政府という高張（提燈）を門の外へ二本立ててね、そして、その手前は殿様になった気になってるだ。そだで、内務省、内務大臣の大久保利通が内務大臣でいるのに、その命令をちっとも聞かねえちうだ。そんな事はいけねえちうだで、それから大久保はね、かなりな人間をまあつかわしちゃやるけど頑として聞かねえちうだね。俺が何も大阪を治めるから、内務省あた

邦武（渡辺邦武）
肥前の人。明治維新の功臣

小弥太（鳥尾小弥太）
得庵。福沢諭吉未亡人・古錦女史の席に連なっていた

りいらねえ事いわなんでもいいちうわけで、それから渡辺邦武さんを今度はやるだね。渡辺邦武さんが二十代の頃で、そした所が前に行った連中がね、あんな若僧やったって何ならずちうわけで、笑ってたちうだね。それから行ってみた所が、やっぱり頑固にはねつけてる奴を、渡辺も若い元気でね、負けちゃいなんで、議論をやりからかすだ。そした所が、その若僧めちうわけで、椅子を離れて来て、襟首か何かつかんだちうだね。それから渡辺もきかねえで、とうとう二人で組みついて相撲だちうだ。それから属僚たちが来てね、止めるけれど、かまわなんどけ、この若僧が、こんな者がちうわけで、やるけれども、一方は若い元気だし、片一方は年をひろってるもんだで、とうとう、しめえにはせっせと汗かくちうだね。それから、へ、そのうちに、ウン内務省にもこんな奴がいたかちうわけで、それじゃ俺のいう事を聞くかちうわけで、聞かにゃ離さねえぞちうで、とうとうその渡辺が説得したちうだ。そで、渡辺はその事が一つで、出世するでかい糸口になったちう逸話があるがね。其鳳という人はそういう人で、それで連句はなかなかうまいだ。

それからその頃ね、鳳羽、其鳳、鳥尾小弥太、これを得庵（？）といいね、それから川口男爵というけど、これが梅谷かな、梅谷か梅渓だか、それから何だだ、中上川彦次郎なんて実業界の三井あたりの

川口男爵
古錦女史の連衆

彦次郎（中上川彦次郎）
明治時代の実業家。明治三四年没。三井家に聘せらる

古錦
福沢諭吉夫人

蝸堂（松永蝸堂）
天保九年―大正八年。本名＝平七。連句の伎倆世に聞こえ、一日に一七人と対吟、満尾して平然たりという。一代の連句七千巻という。小築庵春湖の門

博文（伊藤博文）
一八四一―一九〇九。明治の元勲。山口県萩の人。初代首相

寒山（山田寒山）

衆ね、こういう衆がね、慶応義塾に集って、慶応義塾の中にね、その連句をやるにはいいような、ま、庵のようなものがあったちうだね。それは何の福沢先生の奥さんがコキンという名でね、その連句やっただ。コキン女と古い錦の女と書くで。それでそういう連中が集まって、それから駿河の蝸堂が捌きをしてね。蝸堂はそれで慶応義塾でそんな連中を相手にしてね、よほど得意な時代があるんだ。とうとう伊藤博文まで来たりしてね。それから伊藤博文の、その何で宮中で行って連句をやった事がある。その連句はどうもね、伝わらないけども、ま、老人のいうにね、それは満尾しなんだけど、あとで満尾するちうことを言ったけど、まあまあ、これは宮中でやった仕事だで、ここでおくがいいと満尾しなかった連句があると、こんな事いったけどね。それはあの、どうも伝わっていねえだ。そで伊藤博文だってね、この何だだ、あの山田だったかな、山田寒山という坊さんがね、姑蘇城外の鐘をね、小さい鐘をこせて頒布会や何やった寒山という、寒い山というね、その人と連句やったのがね、伊藤博文と、

月ひとり秋や占めけん角田川

という伊藤博文の句へね、山田寒山が、

萩折り入れよ管絃の舟

という脇付けてね。その巻、おら、どうも写しときゃよかったけどね、写しもしなんだ。そういう伊藤博文だって連句やっただし、そのね、慶応義塾でやったそのそういう連中のやった巻がいい巻だよ、蝸堂遺稿にゃのってるがね。

蝸堂ちうもんは連句がうまくてね、それはまあそのまことにうまいけれど、それでまあ何だね、蝸堂はまあ、ただ連句きりに遊んでいりゃいいに、それをね、いくらか商人屋（あきんどや）に生まれているからして、油屋して損をしてみたりね。それから何だったな、何かやっちゃ失敗ばかりしていたなんて話があるがね。それから子供に恵まれなんで、子供に。で、ない児には泣かぬためしや秋の風

とかね、何とかいう句もあったりしてね。それから孫の徳太郎という者に最後かかるつもりのが、兵隊にとられてしまったりして、それで娘の嫁入った先で死ぬがね。それだで、その、そういう得意な時代がありながら、恵まれない一生を終ったが、その代わり、連句七千巻やったちうだね。

雅　七千巻はすごいですね。

丈　まあ、そんな巻数やった者は恐らく類例がねえと、他石さんが何を、句集を作ったがね、『蝸堂遺稿』ちうもんを上下二冊。いい連句がある

春湖（橘田春湖）
明治一九年没。七二歳。甲府生れ。江戸に出て巨谷禾木を師とする。関為山、鳥越等栽と共に幕末の三大家といわれた

蒼山（摩訶庵蒼山）
文政二年―明治二年。羽前赤湯の人。江戸末期に為山、春湖とともに三大家と称された

烏谷（黙蓑庵西烏谷）
浜松の人

引馬野の記
遠江国浜名郡の浜松を古音引馬の駅という。浜松西郊の原野、三方原に南接する。引馬野ににほふ榛原入り乱れ衣にほはせ旅のしるしに（万葉集巻一）

だ。どうも、この蝸堂は春湖に習ってるがね、春湖という者が、春湖、蒼山、契史、この衆の連句がまあ、あの時代でもこんな連句があるかと思うほどのすばらしい連句だね。

雅　あ、それは皆、幕末の頃ですね。

丈　そうだ、まあ、幕末だね。

雅　蒼山というのは、いつかお話に聞いた、駿河かどっかの人ですね。

丈　いや、越後の赤湯の人だだ。

雅　アオイ山と書く。

丈　ウン、アオイ山だ、蒼山ね。それでその蒼山はね、摩訶庵蒼山といって京都にいて、それからして浜松にね、あそこに烏谷という、カラスのタニという人が、これも相当にいい人で、烏谷がもう老人になって、ここのおめたちの組では蒼山をよんで、蒼山をここに何して、蒼山に習えという。それからして、この衆に招かれて、そで蒼山は遠州に来て、遠州の見付だね、見付で一生終るですだ。一生終るちうけど五十ね、五十幾つだよ。若くて死んでしまうだ。蒼山は文章もよくてね、引馬野の記なんいうものもあり、また、雲鳥日記という、春湖と二人でね、西国廻って歩いたりして。それで何だだ、春湖はね、蒼山や契史とやった、その時代のようなものが後には出来ねえだ。相手がねえだ。ほだからし

て、春湖自身は蒼山に決して劣っている人ではないけれど、今度は相手が劣ったものばかり相手にしているだで、ほだで、先に死んだ人が得していると、後に残ったものが損をしていると。そすると、儂から言えば、竹邨は早く死んでおれは後に残ったお陰に、竹邨とやったような巻は、それから後にはできねえと、あれは竹邨のおかげにできたぞと言われたって、しょうがねえだ（中村竹邨）。長生きをして損をしたちうわけだ。

雅　なるほど、ここに出ている「下蔭」じゃない、「山一重」ですか。

丈　それやる時やなん、こういう事ですだ。その前にもまあやっててね、ちっとそのみっしりした巻を巻こうとそれからして何句も付けてしなんで、まあ、一句ずつじゃ何だか、まあ二句ずつにして。

雅　ハア、葉書に二句ずつ書いて。

丈　エエ、自信のあるものを付けてやろうと。

雅　それで、相手がえらぶわけですか。

丈　エエまあ、その二句のうちをね。

雅　一つ取るわけですね。

丈　取る句がなかったら、言いたい事はいうと、言いたい事はいうけど、喧嘩にならないように、あくまでも、自分たちのこしらえる巻をいい巻にこしらえようという一点に集中して、そしてやろうとするにゃ、どう

しても一度会って約束しておくがいいちうわけで、それ前にはただ文通だけで、会っていないだ。

雅　年頃は先生と同じぐらい？

丈　儂よりね三つ四つ下だだ。それからして、それじゃ、おらほうから行くちうわけでね、儂んとこへ竹邨が来てね、そこで固い約束してね、たとえ、どんな批評を下そうとも、それは句の上の事で、喧嘩にはしないように、旧派の人ちうものは、ちょっとその何かいうと、それをきっかけに喧嘩するですだ。ウン喧嘩別れになる、そんな事じゃどうしてもだめだちうわけで、それでやったのがその「山一重」だだ。それでね、喧嘩しちゃ、こういう事も何だだ。甲府に松本守拙という人があって、その人にオラ大変世話になったけどね、その人と出雲の松江にね、好一という人があって、三吟でやった事があったがね。わしの句を好一の方へやって、こう廻るのでね。ところが、わしの句がね、

　机によれば冷る膝皿

と、膝小僧が冷たいという句を取って、それへ好一が、

一蝶は配所の月をよそ顔に

というのを守拙がきめておらの方によこしたもんで、これはいけねえと。冷る膝皿という自の句でね、絶対動かない自の句へもって行ってね、他

曲川　出雲の人
蓬宇　三河の人

の句をこういう付け方はよくねえと言って、わしが守拙の所へ言ってやっただね。もし他の句を付けるならば、

一蝶が唐紙さっと開けて来て

というように、他を向かい合わせにゃいけねえと、こう言ってやった所が、守拙がね、古人を眼前に活躍させるちゅう法を、おめえは知らねえかとこう言って来る。それは知ってると。知ってるけどこういう、それでその机によっている人を一蝶と見立てたのだと言うもんだで、見立てたちったって、自と動かねえのを他に見立てるのはいけないと、そいってやった所が、しまいには藪たたいてるだ。俺は出雲の曲川にも、三河の蓬宇にも頭たたかれた俺だからして、俺の言う事はまちがってねえで。それで読書百遍で、幾度でも読んでみろと、間違っちゃいねえと、こう言ってるだ。そういうことをいったことがあるけどね。

雅　その巻は完成したんですか。

丈　それは満尾しただ。満尾したけど、わしゃ手前の手控えの方を直しているだ。向うの帳面には、それから好一だってね、守拙に言わせりゃ、ま、西国の方じゃ、好一が一番だと言うけどね。儂の句にね、

青竹に祭の鬼の叩かれて

という句をやって、それを取って、それからして、

見ている男の泣き笑ひする

と付けてあるだ。そんな付けじゃねえ、どうしようもねえだ。そんなみじめなものね、叩かれたのを見て気の毒に思ったか、泣き笑いすると、ちっとうがって言えば、その泣き笑いする男の親爺さまか何か鬼の役に頼まれて。出たものを、祭だもんだで叩くたって、何の叩きのめすちうほどじゃなくても形をするだけだんね。けど、そういう時には、うまく受けなくちゃ駄目だわね。こりゃ大上段にふりかぶったのを、ぱちんと受けといて、すぐその返す竹刀でお胴のすいた所へ斬りこむというように行かにゃ、面白くねえやつを、泣き笑いする。なんだかそんなの連句でも何でもねえ、前句を生かすちうことを知らねえだ。そこに行きゃ、あの武州の秋香などはね、

十も二十も子を引いたいた

と、鼬（いたち）の事をいたともいう。それがね、鼬がね、とても仔を産むやつでね、それがちょろちょろとまあ、いくつか飛んであるく。そこでね、

勝手さへなき古家の雨の漏

という句をマアわし付けただ。古い家のね、くさったような庭のあたりに鼬がとび廻っている場所を付けて。そうしたら、秋香老、秋香老のそういう所がおもしろい人で、

むんずとつかむ幽霊の裾

と。それから幽霊の裾と、本当の幽霊に裾のある筈もねえし、幽霊だけど、そんなものあるかないか分からんけんど、そいつ、わしゃうけてね、胸の火の炎の先やおそるべし

というね。そういうそのにせの幽霊とけいってね、息子が死んでね、嫁様を追い出しといて、弟にあととらせたい、別の所から嫁様をもらいたいというようなのでね、鰹節を幽霊の角にしてやったという、まあね、そんな咄もあるですだ。まあ、そういう所と見て、

胸の火の炎の先やおそるべし

そうすると秋香老はね、

蚊の針あとのはれし拾ひ子

とね。捨子がね、蚊にくわれて、むごいことよ、ま、こんなにぶくぶくと蚊にくわれていると言って抱き上げる、そういう運びの所でね。それに続いて又いつまでもやっていたじゃ仕様がないで、それでまあ、その捨子という所で、キリストが生まれた時、男の子が生まれていかにもいい子で、けど戦にまけて男の子はまあ皆殺してしまえと。それからして、その死海という海だか、湖へしずめるように籠に入れて、もって行ったけど、いかにもそのいい子で海に沈めるに忍びなんで、草の中に置いて

来たと。そんなような事をね思い出して、月の出て、そこは月の座になるだ。

月の出て青葦原の一そよぎ

と。そしたら秋香老はそれにね、

俵の空きにかこふ雪隠

という、そういうまあ、付けをした。青葦原の湖水の傍のような所にね、あいた俵でかこった雪隠をね出した。それからわしがそれに付けたのが、よく弓をひく連中が矢場の近所へ炭俵をかけた小便小屋のようなものを作るわね、そういう所と見て

へら弓にすぎたうつぼもかほめたし

と、四分位な弓で、それからお父さんの用いたうつぼだか、どっかの糶(せり)で買って来たか、猿皮の靫(うつぼ)か何ぞをね、不似合なのを持ってね、おめえにゃ、すぎたなんてかまわれる。

へら弓にすぎたうつぼもかほめたし

それから何だったか、そういう運びで、秋香老は西国を長門まで行って、行脚たってあの衆のは何も行脚というじゃねえ、まあ漫遊のような、聞えた俳人の所を長門まで行って、それから帰って来て、帰りに信州に入り、それからわしん所へ来て、そこで善光寺へお参りしてうちへ帰っ

蕉風
俳誌。天野雨山の俳誌。大正八年一月創刊

た。その時に又、秋香老はね、うそと自慢はきくはいやだが、ほらふきゃおもしろいと、自分もほらふくだ、芦丈が所へよって、この巻は二時間で巻いた巻だと。二時間じゃねえだ、四時間位はかかったけどね。それから、その時に廻って来たうちで、一番たっしゃなのは芦丈だな、どうも他石（贄川他石）の方がてまをとって、てまを取って、どうもため小便、小便こらえてるようで、どうも気持が悪い、とこんな話をしてね。

その他石さんが一度「蕉風」という雑誌に、こういうことを言い出して、何でも彼でも五句去りにしておきゃ一番世話がないと言った。それでわしゃすぐ反対したが、その理由は、植物なんてものは季題に上げただけだって何千とある。それを五句去りにすると、花が二本あるで、それでこうやって行くと、植物で五句去って植物で、その次に五句去って植物にすると、花との間が近くなる。すると、立句が植物で、その次に植物一つ出して、それから花、又、ウラに行ってもそういう形になる。それで誠に、その沢山ある植物をせばめられてしまう。植物、生類でも何でも、そういうあんばいでまずいと。それだで、何でも彼でも三句去りにしておいて、それから、五句去りというものは、いつか話した

衣季や竹田の船路夢泪、月松枕五句隔べし

こういうものは、五句去らにゃいけないという、それでパランとしたも

歌仙
表六句裏十二句名残の表十二句名残の裏六句、三六句からなる連句の形式。二花三月を配する

他
人情他。自分以外の他人や他人の行為を表現した句

のをしておく方がよいと、そんな事を言ってね、他石に言ってつぶしてしまったがね。

雅　俳諧の式目は大切ですね。昔の俳諧を皆でよく研究しなければなりませんね。

丈　エエ、昔の俳諧、いい俳諧というようなものね、元祿以前の芭蕉のものでは「冬の日」、蕪村の「ももすもも」歌仙、これらはすばらしいものですだ。

雅　また、例の私どもの歌仙についてですが、

人を呑み人吐き霞む城高く

これは他でしょうか。

丈　うん、そう他だ。

雅

写真記念にとれとすすめる

これは、だから他ですね。

丈　これは城を背景にやってるでしょう。

雅　よくやってますね。どこでもね。それから

片言の碧い瞳夫婦もてあまし

ウフフ、それで。

自他半
一句の中に自と他が存在するものをいう

丈　すすめられる、これが何だだ、外人だね。何をどういうふうな。
雅　そすと、これも他ですね。
丈　ええ、そう他。もてあまし、だでね。これは自他半だね。
雅　なるほど。それから、
　シャネルファイブの薫りどこまで
丈　ほすと、この外人のね、外人のこれはあの薫りだね。
雅　そうですね。
丈　こういうのはマアやっぱり、その何だね、前句のその人のあしらいだね。
雅　それから、こんどは、
百姓にして客泊める家ありて
と。そうすると、この薫りはただ、誰かが泊まって、こんな百姓家だけども、寝具か何かの器のようなものにネ、薫りがあると、この百姓家だけど。そすと、これはやはり場。
雅　そうですね。
　門の流れに洗ふひともじ
これもその場、エエ、自と見てもよいですね。
名鐘もひびの入りしか音寒く

これは先生がお付けになったのでしたね。これは自ですね。
　勧化衆草鞋新しくはき
これは他ですね。
大和路の空紀の路よりなほ青く
これはその場、
　剃り立て頭月に照らされ
これは他ですか、自他半ですか。
丈　これはまあ何だね、後の付けによって、自とも他ともなるという句だね。
雅
柿盗む子等のしぐさを可笑がり
ウン可笑がるんだから、自他半でしょうね。
丈　おかしがりだで、これは自他半だね。これは照らされている人の子らの柿を盗むところを笑っているところだ。
雅
　村の祭の太鼓聞こゆる
これはその場。
丈　うん、その場の出来事だ。

雅　強酒に酔ひしれ出れば野分めき
これは自ですね。
丈　エエ。
雅　黒潮のりて漁にわく浜
これは他ですね。
丈　エエ。
雅　繋ぎをく牛が端綱を舐り切り
これもその場。
丈　エエ。
雅　何の匂ひか風がもてくる
これは、こんなのは、まあ、これは自。
丈　ウン。
雅　自みたいなものですか、これは。
丈　そうだね、自、何の香かいい香がすると。

雅　躬恒形の硯を花に使ひそめ
これはもちろん自ですね。
丈　これは自だ。
雅　絹糸のごとけぶる春雨
これはその場。
丈　その場だ。
雅　これで大体何ですが、通してみてどうでしょうか、この巻は。
丈　この巻はいいね。
雅　アアそうですか。
丈　これは相当いい巻だ。
雅　ハアハア。
丈　というのは、その展開がうまくいっていると。
雅　エエ。
丈　玉が転んでるだ。見事に。そして一句一句としても、相当なつぶっこい句がね。ウン、いい巻だ。
雅　やっぱり何でしょうね、たとえば、伊那の方とか東京の方、松代の

花相撲
本場所以外に随時興行する相撲。例えば、先代若の花の引退相撲などに贔屓筋の花をもらう、その収入の利益をもらう。花とはご祝儀のことで、それを集めるための相撲

方、あるいは松本のこの連衆とかみな、特色があるでしょうね。

丈　あるね。

雅　東京の方たちの作品を、『この一路』などで読んでみますと、非常に何ですね、句と句は離れて、非常にそんなところおもしろいと思いますが、たとえばアノちょっと悪口めいた所を申しますと、何かこう、新聞のニュースをこうはさんであるような気がするところがあるんですけどね。

丈　あるね。そしてね、そして中には何か変わった巻を作りたいというような、わざとする癖があってね。たとえば、花の句に、

花相撲横綱四人土俵入り

という句を匂いの花に付けて来た。そした所が、おらとこの孫が、あのいつか連れて来た孫が読んで、「おじいちゃん、これじゃ作文だない」というから、ウン作文だ、作文だちうだ。それからね、それはあの何しろ、「横綱四人土俵入」と、それは作文に相違ない。その土俵入がまずいと、何とかそこで俳諧にしなけりゃね。しなけりゃいけねえと。第一ね、いけねえという事は、花相撲というけれど、それは昔の制約の本ではね、正花というものを、春の花はマア当り前で、夏の花を若葉の花、残花、のこり花というものを夏の正花、秋の正花は花相撲、花火、これが秋の

四季の正花
花は普通、春季の扱いをうけるが、句の転じによって「花の定座」が春だけでないこともある
春＝花

正花、それから冬の正花は餅花、返り花、そういう風にそのしてあるから、花相撲と言えば、秋の正花と決めこんでいても、今の相撲はね、本場所も年に六回あって、そのあいまに巡業して歩いて、今じゃ、相撲を秋季に仮りにしてもね、ま、前からの習慣上、秋季とかりにやっても、本当の相撲というものの季感はないだね。それからしてまた、花相撲という事は、それじゃ、若の花の引退相撲があったでしょう。ああいうのが花相撲だ。そのま、贔屓筋の花を貰う、それからして、その時の収入の利益はその者にやると、そういうのが花相撲でね。博奕打ちがよく花会というような事をね、花会にたれそれがいくら包んで来た、誰がいくらだというのが、博奕打ちの親分たちの花会というだ。あれは、それと同じ事だ。あれは花をあつめる目的のためやるんで、決して秋季というような事はねえ事だ。だで、もう花相撲なんてものを正花に使うという事は、今時やる事じゃねえと、おら、こういう事言ってやったが、この巻どうしたか、あとでどういう風に直したか知らねえだが、ウン。

丈　それからしてね、その四季の正花をマアこしらえてあるちうのは、巻いて行った都合で、どうしても前句の都合で、これはまあ冬の正花にしにゃいけねえとか、秋の正花にしにゃいけねえとか、いうような場合にはね、使う用意で、それよりもまっと重要な事は、何だだ、古式の百

夏＝余花・若葉の花・花氷・花火
秋＝花相撲・花燈籠
冬＝返り花・餅花
歳旦＝年の花・花の春

古式百韻
古式百韻は八花七月。各面へ花を出し月も出すが、初めの表が一〇句で、名残の裏が六句なので、ナウの一面だけは花だけで月は出さない。四季の花を付ける

姨捨
更科の秋、あきの姨捨とすれば月になる。是等を隠し月と云也（正風二五条）。月の名所

吉野
花に吉野は付きものであるので、吉野が前句に付いたら花を引き上げる。花の名所

韻というがあるだ。これはアノ何だだ、ウン各面に全部花出すですだ。

雅　百韻だと四花七月になりますか。

丈　エ、何は、それは普通の百韻で、古式の百韻は八花七月になるですだ。

雅　ハア。

丈　各面へ、どの面にもみな花が出るですだ。月もどの面へも出るが、ただ古式の百韻は初めの表が十句で、名残の裏が六句だでね、それでナウの一面だけは花だけで月は出ないだ。そだで、月が一つ少ないだ。

雅　普通は初表が八句で、名残の裏が八句、あとは十四句ですね。

丈　普通の百韻はね、それで古式の百韻の場合は四季の花を付けるだ。四季の花と雑の花とね。そういう必要があるが、普通の巻じゃ、そういう事はねえと。それからしてね、前句へ姨捨が出たら月を引き上げてくる。どこでも、それから吉野という前句が出たら花を引き上げると、どこでもかまわない。そういう時にもし、その吉野が冬の吉野であったら、返り花付ければよい。

雅　ハハア、なるほど。

丈　そういう自然に出来ることはよいが、わざわざやらっと思って花と月を前の句で言わなんどいて、それから最後へもって行って花相撲にし

晋風（勝峯晋風）
明治二〇年―昭和二九年。本名＝晋三。東京生れ。句作を父錦風より学び、松宇の「にひはり」を継承し「黄橙」と改称して主宰。日本俳書大系の刊行、他著書多数。「六・十二・六」の新連句形式を提唱

て、挙句を月にして、そういう、わざわざこしらえた変体はいけねえだ。それからまた、実に過ぎる句もよくねえ。それはその通り、御尤そのままで、作文だ、いわゆるね。ハア、そういう事をよくやるだ、ウン。こんらの句だってね、

枝豆をそへてくれたる兎の子

なんのだって、こういうのが実際あっても、実に過ぎる。

雅　エエ、詩がないですね……。

先生、実はあのさっき言ったように、芭蕉の書簡集を読んでおりますとね、付方十七法ですか、そういう言葉が一カ所出て来ます。その外にまあ、俳諧というものは、どういうものがいいんだというようなことを書いたところもありますが。

丈　何という人と本かね。

雅　エエ、これは勝峯さん（晋風）の『芭蕉書簡集』ですが。

丈　ウ～ン。

雅　外にも、芭蕉の書簡を集めた本はあるようですが。

丈　勝峯氏はまあ割にいい方だけれども、アノ学者の人たちがね、ま、どうも、それは間違った勘違いしたようなことをやってるからしてね。それで勝峯氏は二十四句の連句をこしらえて新連句だと言ってね、それ